

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 16 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520978

研究課題名(和文) 開発から実践へ - 安心院農村民泊による地域再生のモデル化と移植に関する政策的提言

研究課題名(英文) Practice of Development--Policy Proposal on the Modeling of Regional Development based on Ajimu Farm Village Stay and its Transfer

研究代表者

前川 啓治 (MAEGAWA, Keiji)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：80241751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)： 数次におよぶ安心院その他の農村民泊における資料収集、インタビュー調査および参与観察から、農村民泊およびそれを取り巻く社会的環境を理解し、地域活性化としてのその手法の可能性と問題点、今後の展開および他地区での展開の方向性について研究し、「安心院農村民泊のモデルと課題」として総括している。人類学的アプローチとして、形式化された図式的なモデルではなく、ホストとゲスト、民間と行政、開発と観光が交差する空間でのインターフェースにおける相互作用として農泊の展開を捉え、その他の地域活性化の手法との接合の可能性を探り、そこから読み手の理解が他地区への応用の鍵を見い出せる叙述形式のものとしてまとめた。

研究成果の概要(英文)： By collection of data, interviews, and participant observation in several fieldwork in Ajimu and other areas where farm village stay is the main focus of regional vitalization, I examine the possibility of farm village stay as a means of effective regional development, and find its problems as well as its social circumstances, and construct it as "a model of Ajimu farm village stay and its problems." From the viewpoint of anthropology, grasping its development as interactions in the interface where host and guest, non-government organization and public administration, and the phenomena of development and tourism intersect each other, and seeking the possibility of articulating with other means of regional development, I summarize descriptive model which readers can find the key to its application to other areas.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード： 開発 農村民泊 グリーンツーリズム 規制緩和 もてなし アクター 女性 都市農村交流

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が世界の周辺にまで影響を与え、地域社会が変容している。

都市社会におけるその変容や国家レベルでの変容は、東アジアにおけるマクドナルドのメニューや時間・空間の専有によって、ローカルの人々が、グローバルなモメントと単一文化をローカル化して受容するローカルな諸相を研究してきた。

こうしたグローバルに対するローカル地域の対応として、さらに周辺の地域の人々はどうのような対応を行ってきたのか、ということがそこから派生する問題として浮かび上がってきた。

いわゆる「限界集落」という言葉によって示される周辺地域の存続が以前から危ぶまれている。こうしたなか、グローバル文化を体現する都市の住民と対等な関係性を築き、地域活性化をはかる試みである農村民泊が成果をあげてきた。農村をただ「周辺」として位置付けてきた従来の見方に対し、都市と農村をつなぎ、農村を活性化する有効な手法であるこの「農泊」をとりあげ、日本各地の農村に広く展開できるかどうかを検証することは、実践的研究を重視し始めた人類学、とくに「開発の人類学」にとって有益な研究であると考えられた。

2. 研究の目的

従来インフォーマルな宿泊形態とされてきた農村民泊（農泊）が、大分県安心院（あじむ）においてフォーマルな制度化を達成し、地域再生を推進してきた。その過程をインフォーマルおよびフォーマルな両アクターの能動的役割という視点から捉え、農泊制度化過程のモデル化を試みる。

その際、とくに規制緩和という視点から、どういう経過を経て、従来の規制に縛られてきた農村での宿泊が可能になったかを法的な観点から跡づけることにも主眼を置く。

そして、そうしたモデルを筑波山麓地域等、他の地域に適用可能かどうかを検証する。こうした点に関し、ただ（社会）科学的に、法的に、距離を置いてアプローチするのではなく、人類学的な取り組みとして、人類学者自身の問題意識の醸成過程と安心院農泊という対象への理解の過程、他地域への応用過程をインターフェースという観点から明らかにする。

3. 研究の方法

数次におよび安心院、南アルプス町、筑波山麓地区など、その他の農村民泊に関する資料収集、インタビュー調査および参与観察から人類学者の関わりを含めた「開発誌」の作成を行う。農泊に関連付けることができる観光による地域開発の事例の現地調査を全国各地で行う。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

(1-1) 農泊をサステナブルなグリーンツーリズムというオルタナティブ・ツーリズムに改めて位置づけ、その独自性を明らかにすることができた。

(1-2) ドイツなどヨーロッパの先進地域に学ぶ過程は、隣接する、より大規模な観光地である由布院の展開と並行して捉えると、安心院におけるローカルなアクターによるグローバルへの視線が見えてきた。

(1-3) ローカルに位置する安心院地域の地域NGOと地域行政の官民一体の新たな農泊への取り組みが、国レベル、県レベルでの規制緩和を実質的に促してきた過程を、重層的な「インターフェース」という視点から明らかにした。

(1-4) もてなしという行為をインターフェースという点から捉え、ホストとゲストの関係性を、観光にありがちなホスト＝日常、ゲスト＝非日常という単純な二元論から解放し、ホストとゲスト間の優位性を解消するだけでなく、両者の間に生じる日常、非日常の入れ子的で複雑な関係性の表出を理論的にも端的に捉えた。

(1-5) また、ホストである受け入れ農泊家庭では、女性がイニシアティブをとり農泊を推進し、また農泊家庭の女性同士が連携し、地域文化の保護・伝承に努めるなど、従来の農村社会では限定的であった女性の経済と文化の担い手および文化の積極的継承者としての、（アクターとしての）存在感を示すことができた。

(1-6) アクターという視点から農泊のリーダーたちの役割とその変化、高齢化による安心院農泊の継続性など、現状の問題点や農泊の今後の展開についての見解と動きを捉えることができた。

(1-7) (1-3)に関連することであるが、実践的な観点からは、安心院の農村民泊の成功の鍵は一連の規制緩和である。通常であれば食事を伴う宿泊は、観光・飲食に関する種々の法律に拘束され、農家規模では対応できない施設の充実が必要となる。

安心院では「安心院町グリーンツーリズム研究会」と旧安心院町役場を起点に、官民一体となってこうした種々の規制緩和を、実際に「会員制」の「農泊」の実践という形で訴えてきた。

一村一品運動の主導者であった知事の地域活性化の機運ともあいまって、結果的に大

分県もその推進を担い、規制緩和は実現され、農村民泊は新たなスタイルのツーリズムの一つとなり、過疎化しつつあった農村の地域づくりのお手本ともなった。

ただ、こうした官民一体の推進体制による展開から次の段階として、民のより主導的な展開が期されるなか、官民両者の方向性の違いもみられる。農村民泊に直接関わる村民組織と村全体の観光を考える行政の見解の相違とも考えられるが、経済行為の主体性の問題として捉えられ、農泊を中心としたグリーンツーリズムの展開は、新たな段階に入ったということ認識する必要がある。なお、現在では、安心院においても漁村での民泊の展開が始まったが、全国的には既に広くみられる。

(1-8)(1-4)に関連することであるが、人類学者ワグナーの文化の捉え方に、異文化に接して、訪れた地域の文化と自らの生まれ育った地域の文化を同時に識るというテーゼがあるが、その点では、農泊のゲストもホストも各々、自/他の両方の文化を対象化し、意識する過程が農泊である。ホストは自らの地域の文化的価値を見出し、ゲストは都市での生活の問題から一時的にでも解放され、より人間的な関係性を回復する空間が形成されている。

ホストにとっては「村社会の同質性 都市との有意な差異」、ゲストにとっては「都市生活での差異 人間としての同質性」といった契機が存在し、ダイナミックな都市と農村の関係性の展開が期待されてきている。

引用文献

青木辰司、小山善彦、バーナード・レイ
ン、『持続可能なグリーン・ツーリズム

英国に学ぶ実践的農村再生』丸善株式会社、2006、172

Keiji Maegawa, 'Management in
Interface: Glocal Displacement', in
Enterprise as an Instrument of

*Civilization: An Anthropological
Approach to Business Administration*,
Nakamaki, Hioki, Mitsui and Takeuchi
(eds.), Springer, 2015, 86

都市農山漁村交流活性化機構編；田中
満執、『地域ぐるみグリーン・ツーリズム
運営のてびき：都市と農山漁村の共
生・対流』農山漁村文化協会、2002

ロイ・ワグナー、(山崎美恵、谷口佳子訳)

『文化のインベンション』、玉川大学出版
会、2000、246

(2) 得られた成果の国内外における位置 づけとインパクト

グリーンツーリズムという観点から、安心
院の農泊について複数の研究者や研究グル
ープが調査を行い、その成果は論文などにま
とめられてきた。

そうしたなか、「農泊」という地域再生の
手法を、より普遍的に捉え、農泊の形成から
独自の展開にいたるまで総合的に捉え、とく
にそれを他の地域における導入の参考とな
る形にまとめ上げるために、規制緩和に対す
る地域の側からの挑戦の過程を、町、県、国
という行政のレベル全般を射程に入れて、イ
ンターフェースという観点から総括してい
る。そうしたものとして、意義のある成果と
いえる。

また、現在、新たな地域活性化の手法とし
て注目されているのは、フットパスとウォー
カーズアー・ウェルカム協会というローカル
における試みである。日本の農泊がアハカレ
ンなど、ドイツ南西部の周辺農業地帯をモデ
ルに展開してきたならば、これに対し、イギ
リスで展開されてきた動的な観光活性化の
施策が新たに展開される中、それを更なる展
開として農泊と結合させるといふ、複合的展
開の方向性を実践的な立場から考えてゆく
際の基本的なモデルを、この研究は提供して
いる。

研究代表者は、人類学における新たな理論
的展開を「インターフェース」という観点か
ら提示しているが、地域開発の民族誌として
だけでなく、実践の文脈でも有効に用いる
研究として意義がある。

(3) 今後の展望

現在、農泊を立ち上げつつある地域の導入
過程を逐次追いながら、安心院の農泊の展開
が可能かどうかをリアルタイムでフォロー
し、支援し、検証する。また、フットパスな
ど、昨今注目されている地域づくりの手法と
の結合的展開を提案し、支援してゆく。

ヨーロッパ各地の農泊およびイギリスの
フットパスの展開を、日本の農泊およびフッ
トパスによる地域づくりの担い手たちが、ど
のようにローカライズして受容してきたか
を明らかにし、動態的比較研究をすすめてゆ
く。

日本におけるフットパスと農泊を統合し
た地域活性化の手法を、フットパスの研究者
や実践的担い手等と検討し、そうした展開の
あり方と可能性を新たなプロジェクトを立
ち上げて追究してゆく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔図書〕(計 6 件)

前川 啓治、『安心院農村民泊のモデルと課題 日本における農泊の誕生』、筑波大学人文社会系、科学研究費報告書、2015、30

Keiji Maegawa, 'Management in Interface: Glocal Displacement', in *Enterprise as an Instrument of Civilization: An Anthropological Approach to Business Administration*, (Nakamaki, Hioki, Mitsui and Takeuchi (eds.), Springer, 2015, 73-87

前川 啓治、『筑波山から学ぶ 「とき」を想像・創造する』、筑波大学出版会、2015、1-173

Wong HW, and Maegawa K (eds) (2014) *Revisiting Colonial and Post-Colonial: Anthropological Studies of the Cultural Interface*. Bridge21 Publications, L.A., 1-306

前川 啓治、『カルチュラル・インターフェースの人類学 「読み換え」から「書き換え」の実践へ』、新曜社、2012、1-264

前川 啓治、『平成 23 年度フィールドワーク報告書 筑波の過去から現在へ』、筑波大学人文社会科学部研究科 / 国際総合学類、2012、1-83

〔その他〕

ホームページ等

<http://renaissance.hass.tsukuba.ac.jp/>

(1)研究代表者

前川 啓治 (MAEGAWA, Keiji)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：80241751